第３回昇格受験勉強会（令和 元 年 5月 21日〈火〉）

生長の家の「万教帰一」と「原理主義」の関係について（イスラムとテロの関係）

I. 生長の家の御教えは

人間を含む自然界の一切は、唯一絶対なる神のいのちのあらわれであり、神を本源とするという唯神実相の哲理を人類共通の救いの根本原理と定め、「生長の家教規」第５条で「世界のすべての宗教は唯一の本源より発するものにして万教は唯一の真理に帰一し、人間救いの原理も唯一にして二つなきを宣説するものにして、教えの創始者谷口雅春の唯神実相の神学を鍵として全世界の宗教の経典の真義を顕示して人生に光明あらしむるものである」と宣言し、「万教帰一」を標榜する。

① 即ち、万教は本源の神・唯一絶体の真理から生まれて来たものであり、教えの神髄は共通の真理に帰一する。ただ各宗教が創始された時代的背景、地政的環境、民族の言語、習慣、伝統、文化の違いによって「絶体の真理」の説き方が伝播を容易にする表現を用いて来たものであって、所謂ば登山口がいくつにも分かれていても頂上にいたれば共通の真理に到達するのであるとして全ての宗教の尊厳と聖典・儀式や伝道等の多様性を容認するのが「万教帰一」の思考である。

II. これに対し原理主義は

① 各宗教の創始者の教えの言動、聖典の一言一句は、１０００年を超える歴史の変遷を経て複雑多岐化した現代においても、なを字義通りの解釈を現実生活の規範として実行しなければならないとするものである。キリスト教における聖書、仏教における小乗の教義、イスラム教におけるコーランの言葉の解釈を現代に適応させる柔軟性、多様性を拒絶し、自分たちだけが正しく他の宗派は皆間違い（敵）であると断定する。

② イスラームとテロの関係を見るに、テロ集団として悪名高いタリバンやアルカイーダ、そして今の、イスラム國（IS）も聖典の無謬性と字義通りの解釈に固執する原理主義的立場をとり、「騒擾（そうじょう）がすっかりなくなる時まで、宗教が全くアッラーただ一条になる時まで、彼ら（不信仰者）を相手に戦い抜け。しかし若し向うが止めたなら、汝らも害意を棄てねばならぬぞ、悪心抜きがたき者共だけは別として。」（コーラン第二章「牝牛」１９３節）の字句のそのままをもって“悪心抜きがたき”米英等に徹底抗戦を推し進めている。

そして、テロ集団の行動原理のキーワードの第一は「対照化」であり、第二は「自己破壊」である。前者は諸事象を単純な「善と悪」、「敵と味方」、「信仰者と不信仰者」の二つの対立関係に把え、後者は文字通り自爆テロの心理をかきおこし「殉教者は天国に生れる」というイスラームの文言がその支えとなっている。　（『衝撃から理解へ』P.21-25）

これらテロ集団はスンニ派に属し、ワッハーブ主義（同書 P.53）に大きく影響をうけ、「イスラーム信仰者はイスラームの真っ当な道から逸れて間違った道を進んでいる。

だから神に喜ばれ、受け入れられるためには唯一の正しい道に立ち帰る以外にない」とし、イスラームの教えに混ざったすべての不純物―神秘主義、合理主義、シーア派的思想を含む異端的、異教徒的要素のすべて（柔軟性、多様性、理性）―を取り去るべしとし、イスラーム法の解釈の多様性こそがイスラーム社会を分裂させ、後進性と弱さを生み出した要因であり、このことを信ずる者が本当の信仰者であるという二者択一的思考にたち、“不信仰者は異教徒とみなし、それに相応しく取り扱うことを躊躇しなかった”と評されたワッハーブ派の教条的で頑なな信仰がテロ誘発のバックグランドになっている。

因みに「イスラム國」はスンニ派の過激思想、ワッハーブ主義を奉じ、大量破壊兵器貯蔵の疑いで、イラクのサダム・フセイン大統領（スンニ派）を武力で打倒したアメリカを敵として誕生し、教義に柔軟性を持ち、穏健なシーア派のイスラームすら“悪心抜き難き者共”として聖戦を唱えるテロ組織であり、祖国を離れた移住地での文化・制度的差別や貧富の格差、アイデンティティーの危機感で疎外されたイスラームの若者に、インターネット技術を駆使した“教化力”で参戦を訴え、兵士をリクルートして組織の維持を図っている。

（同書 P.54-56）

Ⅲ. 本当のイスラームとは

① 1400 年前アラビア半島で創始されたイスラム教は、現代では中近東、アフリカ、東南アジア、インド、パキスタン等異民族の習慣、伝統文化が多岐にわたる世界各地に浸透し、日常生活の細部まで想定する聖俗一致を理想とする宗教が受け容れられている事実は本当のイスラームの教化力が如何なるものかを物語る。

② その一つは、イスラームには教会組織がなく、中央集権的な教義の統一性がなく、各地域に見合った多様性が優先した。スンニ派の厳格主義、シーア派の穏健主義が併存し、それぞれの信仰者も固執派もあれば中間派もあって融通無礙の信仰姿勢で各地域の特殊事情にも対応する柔軟性、多様性に特色がある。（同書 P.207,208）

二つ目は宗教の多様と寛容である。「コーラン」五章５３節にはユダヤ教徒もキリスト教徒もイスラム教徒も「啓典の民の共存」を認め、「剣とコーラン」で改宗を迫るイスラームではない寛容を説いている。 （同書 P.192,193）

これは同時にアブラハムを起源とする三つの一神教が本来一つであることを「コーラン」が明確に示しているもので、生長の家の「万教帰一」に通じる思考である。

三つ目は理性と論理性がイスラームの伝統の大きな特色であり、イスラーム法を各地域の千差万別の習慣等に対応して説法する論理性、「コーラン」による啓示を民衆に説く理性は多くの神学によって醸成され、また神学を深化した。この他「イスラム神秘主義」スーフィズムの無念無想の礼拝三昧に没入する「神人合一」の修行と自我滅却と神我一体感の内面的信仰深化の観行体系の確立等があげられる。

③　このように世界第二の宗教は教義や伝道の多様性、柔軟性、理性・論理性、寛容と内面性を備えた奥深い宗教であり、万教帰一思考の教義をもった平和を愛する活力ある教えであってテロ＝イスラームでは決してない。

Ⅳ. 人類がこれからの宗教的対立を克服するためには、「原理主義」との対極にある生長の家の説く「唯神実相」「唯心所現」「万教帰一」の教えが国内のみならず全世界に「人類光明化運動・国際平和信仰運動」として飛躍的に展開され「神・自然・人間の大調和」に結び合う世界を実現せんとする日々の実践が重要である。

（注）スンニ派の国々：サウジアラビア（ワッハーブ派を国教としている）湾岸諸国、イスラム国
シーア派の国々：イラン、シリアのアサド政権、イラク現政権、レバノンのヒズボラ